

## 『賦光源氏物語詩』を読む（五）

——蓬生・関屋・絵合・松風——

本 間 洋 一

## 十五 蓬生（濡標并之一）

思婦牆垣空獲落 思婦の牆垣 空しく獲落たり

遂為牧豎放牛園 遂に牧豎の放牛の園と為りぬ

見花便入蓬蒿徑 花を見ては 便ち入る 蓬蒿の徑こみち非相（圖）猶尋松柳門 相すきに非ざるも 猶し尋ぬ 松柳の門

荒院僕僮隨日減 荒院の僕僮 日に随ひて減じ

閑庭草樹逐年繁 閑庭の草樹 年を逐うて繁し

以鞭払露爰消息 鞭を以て露を払ひ 爰こゝに消息す

淚底只聞懷旧言 淚の底に只だ聞く 懷旧の言

（七律。園・門・繁・言（上平声尤韻））

卷名は第三句に「蓬蒿」として詠み込まれ、草深い荒廃した

場を示す。光源氏が須磨・明石で謫居生活を送っていた頃、都では彼の不在を嘆く女性達も少なくなかったが、殊に悲惨な境遇に陥っている女ひとがいた。末摘花である。この巻ではその暮らしぶりと光源氏との再会が中心となる。以下聯毎に訳を付せば次のようになるだろうか。

物思いに沈む女ひと（末摘花）の家の垣根は荒れていかにも寂しげであり、とうとう牧童が牛を放し飼いにするような放牧の園と化していたのでございました。

（卯月の頃、光源氏様は花散里を訪う途次、松に垂れ下がって）藤の花の咲いているのを御覧になり、（末摘花の住居を想い起こされ）蓬茂く荒れたる家の小道に入られたのでしたが、そこは杉ならぬ松の大木や枝垂れた柳のある

門<sup>かど</sup>なのでした。

その荒廃した(末摘花の)家では、お仕えする下僕達も日毎に少なくなる始末で、ひっそりと静まり返った庭の草木も年を追って茂り合うようになっておりました。

(惟光が蓬の)露を馬の鞭で払い、(光源氏様をその家にお入れし)その来意をお告げになられたのですが、(末摘花は光源氏様と対面されても)涙にくれつつ、ただ(彼の)昔を想いかえすお言葉を耳にしているばかりでございまして。

首聯の背景は、光源氏が謫居に旅立った後、末摘花が「しはしは泣く泣くも過ぐしたまひしを、年月経るままにあはれにさびしき御ありさま」(②326頁11～12行)で、荒れ果てた邸宅や由緒ある古い調度品を譲ってくれないかと申し込まれたりする困窮ぶりを描いた後に見える次の条であろう。

かかるままに、浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒をあらそひて生<sup>お</sup>ひのぼる。葎<sup>むぐら</sup>は西東の御門<sup>みかど</sup>を閉ぢ籠めたるぞ頼もしけれど、崩れがちなるめぐりの垣を馬・牛などの踏みならしたる道にて、春夏になれば、放ち飼<sup>あけそま</sup>ふ総角の心さへぞめざましき。

(②329頁10～14行)

「思婦」は物思いにふける婦人。ことに恋人や夫を思<sup>おも</sup>う女。「東南有<sup>三</sup>思婦<sup>一</sup>、長歎充<sup>三</sup>幽闥<sup>一</sup>」(陸機「為<sup>三</sup>顧彦先<sup>一</sup>贈<sup>レ</sup>婦二首」其二「玉台新詠」卷三)「誰家思婦秋擣<sup>レ</sup>帛、月苦風淒砧杵悲」(聞<sup>三</sup>夜砧<sup>一</sup>「白氏文集」卷一九)などとあり、本朝でも「還入高楼裏、空催思婦情」(菅原清公「奉<sup>レ</sup>和<sup>三</sup>関山月<sup>一</sup>」『経国集』卷一〇)などと詠まれる。「牆垣<sup>レ</sup>はかきね。『牆垣、牆也』(『広雅』)「修<sup>三</sup>牆垣<sup>一</sup>、周<sup>三</sup>門閭<sup>一</sup>」(『管子』四時)などとあり、「阮家南北旧来隣、不<sup>レ</sup>隔<sup>三</sup>牆垣<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>愧<sup>レ</sup>貧」(高丘末高「無<sup>レ</sup>牆隣」『新撰朗詠集』卷下・隣家535)と見える。「牆」は「牆」の異体字。「獲落」は寂しげで荒廃してがらんとしている様子。「獲落危牖壞<sup>レ</sup>宇、秋有<sup>三</sup>秋声<sup>一</sup>」(公乘億「連昌宮賦」『和漢朗詠集』卷下・故宮530)は一例。「牧豎」は牧童、牛馬羊を飼う子供のこと。「豎」は「豎」にも作る。「外罹<sup>三</sup>西楚之禍<sup>一</sup>、内受<sup>三</sup>牧豎之焚<sup>一</sup>」(潘岳「西征賦」『文選』卷一〇)「別墅幽閑誰作<sup>レ</sup>伴、唯交<sup>三</sup>牧豎<sup>一</sup>与<sup>三</sup>村童<sup>一</sup>」(藤原敦基「秋日青龍寺述懷」『本朝無題詩』卷九・632)はその語例。「牧牛」は牛を放し飼いにすること。「帰馬<sup>レ</sup>尚書曰、帰<sup>三</sup>馬于華山之陽<sup>一</sup>、放<sup>三</sup>牛于桃林之野<sup>一</sup>、示<sup>三</sup>天下弗<sup>レ</sup>服<sup>一</sup>」(『初学記』卷五・華山)とあり、「牛放<sup>三</sup>桃林<sup>一</sup>花脆曉、馬嘶<sup>三</sup>華山<sup>一</sup>草深春」(『讀<sup>三</sup>史記<sup>一</sup>賦』周本

紀』『法性寺関白御集』などと詠まれる。もつとも桃林の故事そのものと、本条は全く関係ないが。

次いで頷聯の第三句は、光源氏が末摘花の住居を訪れる場面と関わる。

大きな松に藤の咲き、かりて月影になよびたる。風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。橘にはかはりてをかしければさし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば乱れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、はやうこの宮なりけり。いとあはれにておしとどめさせたまふ。(②344頁9～14行)

「見花」はここでは藤の花を見ること。後の末摘花の歌にも「年をへてまつるしるしなきわが宿を花のたよりにすぎぬばかりか」(②351頁12～13行)とある。猶、文中の崩れた「築地」は首聯の「牆垣」と重なる部分でもある。末摘花邸の様子は前聯の条にも本文を引いているが、「野ら藪」(②330頁8行)「藪原」(②334頁2行)「などかいと久しかりつる。いかにぞ。昔の跡も見えぬ蓬のしげさかな」(②347頁8行)などであり、光源氏の歌に「たづねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬のものと心を」(②348頁11～12行)と歌われるように蓬の藪茂り合うと

ころなので「蓬蒿」と詠む。「東郭蓬蒿宅、荒涼今属誰」(「再到襄陽訪問旧居」『白氏文集』卷一〇)のように荒廢したイメージを醸成する。「径」は末摘花の叔母(大貳の北の方)が彼女を訪問して「門開けさするより人わろくさびしきこと限りなし。左右の戸もみなよろほひ倒れにければ、男ども助けてとかく開け騒ぐ。いづれか、このさびしき宿にもかならず分けたる跡ある三つの径とたどる」(②338頁7～11行)とあるように、その邸宅の荒れ果てた様を想起すべきであろう。所謂「蔣詡三径」(「蒙求」。隱棲者の貧居を云う)の故事で古注でも触れているので贅言しない。第四句は、光源氏と末摘花の対面の場面に先ずは、

入りたまひて、「年ごろの隔てにも、心ばかりは変らずなん思ひやりきこえつるを、さしもおどろかいたまはぬ恨めしさに、今まで試みきこえつるを、杉ならぬ木立のしるさに、え過ぎでなむ負けきこえにける」とて……。

(②349頁13行～350頁2行)とあることが挙げられよう。「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」(『古今集』982・読人不知)をふまえ、先の引用文にも掲げたように、杉ではない(門前には)

「大きな松……柳もいたうしだりて」いるあなた(末摘花)のお宅に尋ね来たと云うわけである。「栢」は国字。本文は或は「榲」(仄声)にも作る。共に和訓は「スギ」だが借りたもので、本来は別の物。「杉」(下平声咸韻)はここで求められる仄声字ではないので栢(榲の異体と見做しても良いか)字を用いた。

次の頸聯は荒廢する邸宅、窮乏する生活のうちに末摘花に仕える者達が日毎に去つてゆく次のような記述を背景にしている。

すこしもさてありぬべき人々は、おのづから参りつきてありしを、みな次々に従ひて行き散りぬ。女ばらの命たへぬもありて、月日に従ひて、上下の人数少なくなりゆく。もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の住み処になりて……。

(②327頁5～10行)

「荒院」は荒れた庭。また、「院」には「蔣魴切韻云、院、別宅也」(『和名抄』卷三・居宅)の意もある。「廢村已見人煙斷、荒院唯聞鳥雀吟」(嵯峨天皇「和上金吾將軍藤緒嗣過交野離宮」感旧作上)『凌雲集』「荒院珠簾閑卷色、遠宮風旆重翻声」(大江以言「秋深月露冷」『新撰朗詠集』卷上・秋興206)などと詠まれている。「僕僮」は僮僕に同じく召使いのこと(「若

紫」巻の詩にも見えた語)。「池台漸毀、僮僕先離、客斷、柳門、群雀噪、書晶、蓬室、晚蛩輝」(桑原宮作「伏枕吟」『凌雲集』)「僮僕迷、縑素之衣、鷄犬乱、雲泥之路」(為「大藏大丞藤原清瀬」家地施「入雲林院」願文「菅家文章」卷一一)はその語例。「随日減」は日毎に減つてゆく意。「自覺歆情随、日減、蘇州心不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>杭州<sub>一</sub>」(「歲暮寄<sub>二</sub>微之<sub>一</sub>」其三)「白氏文集」卷五四)「莫<sub>レ</sub>道鬢毛随<sub>二</sub>日減<sub>一</sub>、且教<sub>レ</sub>增<sub>二</sub>益子孫鬢<sub>一</sub>」(「落髮」『田氏家集』卷中・85)は類例だが、ここは使用人が去つて行くことなので、前掲「伏枕吟」に「僮僕先離」とある状態に近似する表現ということになる。「閑庭」はひっそりと静まりかえつた庭。「閑」を「間」に作るも同じ。「物在人亡無<sub>二</sub>見期<sub>一</sub>、閑庭繫<sub>レ</sub>馬不<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>悲」(李頎「贈<sub>二</sub>盧五旧居<sub>一</sub>」)「閑庭宿草無<sub>二</sub>復掃<sub>一</sub>、虛院孤松自作<sub>レ</sub>声」(巨勢識人「和<sub>二</sub>進士貞主初春過<sub>二</sub>菅祭酒旧宅<sub>一</sub>」悵然傷懷作上)『凌雲集』)などあるように、殆ど人氣が感じられないような物淋しい住居の様子であらうか。「草樹」は草木に同じ。「清風隱<sub>二</sub>何処<sub>一</sub>、草樹不<sub>二</sub>動搖<sub>一</sub>」(「月夜登<sub>二</sub>閣避暑<sub>一</sub>」『白氏文集』卷一)「樹樓皆白玉、草樹、総花梅」(大枝永野「詠<sub>二</sub>雪<sub>一</sub>」『経国集』卷一三)などはその例。「逐年」は年毎に。「雪花零碎逐年減、煙葉稀疏随<sub>二</sub>分新<sub>一</sub>」

〔題〕州北路傍老柳樹〕『白氏文集』卷二〇〕「叢吐芳榮」  
雖<sup>レ</sup>遇<sup>レ</sup>境、霜逢<sup>レ</sup>老鬢<sup>レ</sup>逐<sup>レ</sup>年衰<sup>レ</sup>（藤原茂明「賦・菊花」）『本  
朝無題詩』卷二・57）などと用いられている。

尾聯は、光源氏が末摘花邸のそばを通りかかり、「とぶらふ  
べきを、わざとものせむもところせし。かかるついでに入りて  
消息<sup>ハ</sup>せよ」（②345頁2～3行）ということ、惟光が邸内に入  
つて探りを入れると、「いささか人げもせず、されはこそ、  
行き来の道に見入るれど、人住みげもなきもの」（②345頁14～  
346頁1行）と思われたのだが、月光の下、格子の中に簾の動く  
気配があり、惟光は「侍従の君と聞こえし人に対面たまはら  
む」（②346頁5～6行）と告げて案内を乞う場面あたりからを  
背景とするようだ。光源氏は「昔の跡も見えぬ蓬のしげさか  
な」（②345頁8行）と仰しやりつつ、

惟光も「さらにえ分けさせたまふまじき蓬の露けさになむ  
はべる。露<sup>ハ</sup>すこし払<sup>ハ</sup>はせてなむ入<sup>ハ</sup>らせたまふべき」と聞ゆ  
れば、

（源氏）たづねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬の  
もとの心を

と独りこちてなほ下りたまへば、御さきの露<sup>ハ</sup>を馬<sup>ハ</sup>の鞭<sup>ハ</sup>して

払<sup>ハ</sup>ひつつ入れたてまつる。

（②348頁8～14行）

と邸にお入りになり、末摘花と対面するという展開になる。末  
句は、その後に光源氏が「年ごろの隔てにも心ばかりは変らず  
なん思ひやりきこえつるを」（②349頁13～14行）「かかる草隠れ  
に過ぐしたまひける年月のあはれもおろかならず」（②350頁7  
～8行）などと調子の良い語りかけをすると共に、「年経たま  
へらむ春秋の暮らしがたさなども、誰にかは愁へたまはむ」  
（②351頁8～9行）などと長年待ち続けていた彼女に対するい  
たわりも見せる場面と関わる。末摘花は涙とともに昔を懐しむ  
光源氏の言葉を聞いていたのであろうか（涙のことは再会後の  
場面に見えない。詩作者の想像か）。「消息」は事の次第を告げ  
る、便りの意。「先遣<sup>ハ</sup>和風報<sup>ハ</sup>消息<sup>ハ</sup>、続教<sup>ハ</sup>啼鳥説<sup>ハ</sup>来由<sup>ハ</sup>」  
〔薄陽春三首、春生〕『白氏文集』卷一七「千載佳句」卷上・  
早春8「和漢朗詠集」卷上・早春10）「禪関近日消息断、京邑  
如今花柳寛」（嵯峨天皇「贈<sup>ハ</sup>綿寄<sup>ハ</sup>空法師<sup>ハ</sup>」『凌雲集』）など  
とある。「涙底」は涙するうちに、涙の中に。「底」は中・裏の  
意にほぼ同じ。「燈前裁縫之昔、曳<sup>ハ</sup>竜尾之露<sup>ハ</sup>、涙<sup>ハ</sup>底<sup>ハ</sup>染出<sup>ハ</sup>之今、  
任<sup>ハ</sup>驚頭之風<sup>ハ</sup>」（大江朝綱「在原氏為<sup>ハ</sup>亡息員外納言<sup>ハ</sup>」四十九日  
修<sup>ハ</sup>諷誦<sup>ハ</sup>文<sup>ハ</sup>」『本朝文粹』卷一四・429）「旧談世事胸中在、既

往交遊涙、底論」（御史源中丞者詩席旧友也入道之後二十許年（下略））『法性寺殿御集』などとある一方、「君恋ふる涙の底に海はあれどひとをみるめはおひずぐぞ有りける」（『古今和歌六帖』133・是則）「恋ひわぶる心はそらにうきぬれど涙の底に身は沈むかな」（『千載集』947・実房）などと歌語としても用いられている。

## 十六 関屋〈霽標并之二〉

杉陰休息廻頭望	杉の陰に休息し	頭を廻らし望む
軒騎幾多逢坂関	軒騎幾多ぞ	逢坂の関
逆旅東南千里外	逆旅東南	千里の外にあり
洪恩父子両州間	洪恩父子	両州の間にあり
若非熊軾過江県	若し熊軾の	江県に過るに非ずんば
争見羽林詣石山	争でか見ん	羽林の石山に詣づるを
九月云窮残一日	九月云に窮まらんとして	一日を残す
涙同流水又無還	涙は流水に同じく	又還ること無し

（七律。関・間・山・還（上平声刪韻））

前の巻は光源氏帰洛後の末摘花との再会を描いたものだったが、この巻は空蟬との十二年ぶりの交情が語られる掌編である。

巻名は第二句に「逢坂関」として詠まれている。以下聯毎に訳を記すと次のようになるうか。

（常陸介様御一行は）杉の木陰で一休みなさり、頭をめぐらし眺めやると、逢坂の関あたりで（通りかかった光源氏の石山詣の）車馬の列がどれ程多いことか知られたことでした。

（常陸介と空蟬様は共に）南国の伊予、東国の常陸と、都から千里彼方の遠方へと（受領の）旅暮らしをなさっておられました。帝の、帝の大恩を頂戴致しておりました。（帰京する）父と（出迎えの）子（の紀伊守）は山城と近江両国の間（の逢坂の関）にいらしたのでした。

もし常陸介様御一行が近江国を通ることがございませんでしたなら、光源氏様御一行の石山寺参詣を目にされることはなかったでしょうに。

九月も晦日となり残すはあと一日だけ。（空蟬様の）流される涙も逝く川の流れるようにもどに返ることはない（ように空蟬と光源氏の関係ももどに返ることはない）のでございしました。

本詩全体は常陸介が任を終えて空蟬と共に上洛し、逢坂で石

山寺参詣に行く光源氏と出交す、冒頭の次の場面を背景にしているであろう。

関に入る日しも、この殿、石山に御願はたしに詣でたまひけり。京より、かの紀伊守などいひし子ども、迎へに来たる人々、この殿かく詣でたまふべしと告げければ、道のほど騒がしかりなむものぞとて、まだ暁より急ぎけるを……打出の浜来るほどに、「殿は栗田山越えたまひぬ」とて、御前の人々、道も避りあへず来こみぬれば、関山にみな下りゐて、ここかしこの杉の下に車どもかきおろし、木隠れにあかしこまりて過ぐしたてまつる。車などかたへは後らかし、前に立てなどしたれど、なほ類ひろく見ゆ。車十ばかりぞ、袖口、物の色あひなども漏り出でて……齋宮の御下り何ぞやうのをりの物見車思し出でらる。……九月晦日なれば、紅葉のいろいろこきまぜ、霜枯れの草むらむらをかしく見えわたるに、関屋よりさとはづれ出でたる旅姿どもの、いろいろの襖のつきづきしき縫物、括り染めのさまもさる方にかしう見ゆ。御車は簾おろしたまひて、かの昔の小君、今は衛門佐なるを召し寄せて、「今日の御関迎へは、え思ひ棄てたまはじ」などのたまふ。……女も人

『賦光源氏物語詩』を読む（五）

知れず昔のこと忘れねば、とり返してものあはれなり。

（空蟬）行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ

え知りたまはじかしと思ふに、いとかひなし。

（②359頁9行～361頁7行）

常陸介と空蟬の上洛が、光源氏の石山詣と重ならぬよう、紀伊守（常陸介の子）から連絡があり、道を急いだものの、女車の多さが災いして遅れ、結局光源氏一行と逢坂の関あたりで逢遇し、彼らは一行をやり過ぐすべく、杉の木の下に休息をとる。見ると夥しい人の数で、車も十台ほど通り過ぎ、華やかな装束の色がこぼれ出るなどして目を奪う。折しも九月尽日光源氏からの伝言がもたらされる。漢詩句は既に取戻せぬものとして二人の関係を綴るが、勿論そこに至る迄には空蟬自身の心の葛藤も確かにあった。彼女は昔の二人の間柄を忘れえず、不義の思いに嘖なまれつつも煩悶の果てに、光源氏への「逢坂の関や」（②363頁5～6行）の返歌を認める。結果として、それが彼の誘惑を助長し、心揺ぶられることもあったようである。また、その後夫の常陸介が死去したことで、息子の河内守（先の紀伊守のこと）が彼女に「いとあさましき心」（②364頁11行）「昔よ



りすき心ありてすこし情がりける」(②364頁9行)と、あからさまに接するようになったことも記され、「うき宿世ある身にて、かく生きたりて、はてはてめづらしきことどもを聞き添ふるかな」(②364頁12～13行)と次第に嫌気を募らせて、誰にも知らせず尼になってしまったので、仕えている人達も「いふかひなしと思ひ嘆く」(②364頁14～15行)他なかったともある。尾聯は敢て言えばそこまで含み込んで表現しているとみることのできるかも知れない。

首聯の語彙について触れておくと、「杉陰」は杉の木陰の意であることは勿論である。白詩「栽<sub>レ</sub>杉」(『白氏文集』卷七)では「愛<sub>二</sub>爾寒不<sub>レ</sub>凋<sub>一</sub>」と松柏に並び凋落せざることが嘉され、「垂蔭覆<sub>レ</sub>谷」(『芸文類聚』卷八九・杉所引の鄧德明『南康記』)ともその木陰は記されているものの、この語例は漢詩に始ど見えず、松との組合わせで「杉松」「松杉」などと表現される程度が多い。本朝では「初瀬川古川の辺に二本ある杉年をへてもまたあひ見む二本ある杉」(『古今集』100)「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」(同、982)などの恋に関わる歌や時の過ぎ、ゆくに掛けるといった表現が想起されるのだが、この物語の場面には特段の意図はないよ

うに思う。「休息」は「南有<sub>二</sub>喬木<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>休息<sub>一</sub>」(『毛詩』周南「漢広」)「人家有<sub>二</sub>来客<sub>一</sub>、休息<sub>二</sub>子新樹之下<sub>一</sub>」(『本朝無題詩』卷二・107藤原周光詩題)などであり、やすみいこう意だが、一般的に詩では殆ど用いられること稀れで散文語と言った方がよいであろう。「廻頭」は頭をめぐらす、振返る意。「繫<sub>レ</sub>纜歩<sub>二</sub>三岸<sub>一</sub>、廻<sub>レ</sub>頭望<sub>二</sub>江州<sub>一</sub>」(『汎<sub>二</sub>湓水<sub>一</sub>』)『白氏文集』卷七)他白詩に例多く、「遠鷄一報廻<sub>レ</sub>頭望、挿著寒雲半欠<sub>レ</sub>環」(『暁月』)『菅家文章』卷四)は本朝の一例。「軒騎」は車馬。「春風十二街、軒騎不<sub>二</sub>暫停<sub>一</sub>」(『鄧魴張徹落第詩』)『白氏文集』卷一)「秋山自似<sub>二</sub>画図成<sub>一</sub>、軒騎登臨幾喜<sub>レ</sub>晴」(『賦<sub>二</sub>秋山似<sub>二</sub>画図<sub>一</sub>』)『江吏部集』卷上)などであり、身分ある人のそれで、よく見える語。「幾多」はどれほどか(とても多いことを念頭に置いて言う)。「不<sub>レ</sub>知龍神饗幾多、林鼠山狐長醉飽」(『黒潭龍』)『白氏文集』卷四)「下<sub>レ</sub>子声偏小、成都勢幾多」(『閉<sub>二</sub>菴<sub>一</sub>』)『菅家文章』卷五)はその例の一端。

領聯の「逆旅」は旅人を迎える宿のこと。「逆旅重居逆旅中、心是主人身是客」(『杏為<sub>レ</sub>梁』)『白氏文集』卷四)「行程過<sub>二</sub>緑浦<sub>一</sub>、逆旅臥<sub>二</sub>青蘋<sub>一</sub>」(『寄<sub>二</sub>白菊<sub>一</sub>四十韻』)『菅家文章』卷四)などである。「千里外」は遙か遠い彼方を指す。「三五夜中新月



色、二千里外故人心」(八月十五夜禁中独直对月憶三元九二『白氏文集』卷一四)『千載佳句』卷上・八月十五夜251『和漢朗詠集』卷上・八月十五夜252「若不九重中掌事、即須三千里外抛身」(歲暮寄微之三首)其三『白氏文集』卷五四「青海千里外、白雲相思」(百濟和麻呂「秋日於長王宅宴新羅客」『懷風藻』)などの例がある。「洪恩」は大恩の意で、「洪恩素蓄、民心固結」(張衡「東京賦」『文選』卷三)とある薛綜注に「洪、大也」と見える。「兩州」は二国の意。父(常陸介)を子(紀伊守)は近江・山城の間の逢坂の関に出迎えた。「盤下中分兩州界、燈前合作一家春」(夜聞賈常州崔湖州茶山境會羨歎宴因寄此詩)『白氏文集』卷五四)は一例。頸聯の「熊軾」は熊を描いた軾(くるまのとじきみ。車の前の横木で伏した熊の形が描かれ飾りとされる)で、ここでは刺史の車の意である。「伏熊軾」又(後漢書)云、三公列侯、安車、朱班輪、倚鹿較、伏熊軾」(『北堂書鈔』卷一四・軾)「熊軾(後漢、列侯伏熊軾、皂蓋)」「(白氏六帖)卷三・車」『諸侯(刺史、古諸侯)隼旗(熊軾)』(同卷二・刺史)などとあり、「乘熊軾而行」景、五袴之歌自高(大江拳周「詳循吏」対策)『本朝文粹』卷三・92)「若謂老而嗜詩之儒、

不可乘熊軾、則白樂天寧非蘇州刺史」哉(大江匡衡「請下特蒙三天恩因准先例兼備中介闕上狀」同卷六・162)と本朝でも用いられている。常陸国は天長三年(八二六)に上総・上野の二国と共に親王任国(遙任)となり、介が実質上守の代行となる重職であった。「江原」は近江国の意。「羽林」は近衛府の唐名で、当時光源氏は内大臣であったが、近衛大将(唐名は羽林大將軍)でもあったのでかく表現している。

尾聯の「九月云窮」は九月晦、九月尽であることを言う。かつて小島憲之(四季語を通して——「尽日」の誕生——『国語国文』昭和52年1月、『国風暗黒時代の文学補篇』塙書房、平成14年)に依り指摘されたように、白詩「三月尽」から学んで、白詩にない「九月尽」が菅原道真らの漢詩等に見えるようになり、『古今集』以後の勅撰和歌集にも定着してゆく表現史の流れが改めて喚起される。「今朝三月尽、寂寞春事畢……半百過九年、艷陽殘一日」(「三月三十日作」『白氏文集』卷五二)は措辞の類例で、参考となったであろうか。「流水」は流れる川の水。「子在川上」曰、逝者如斯夫、不捨昼夜」(『論語』子罕)と孔子が言ったことはよく知られ、「流水光陰急、浮雲富貴遲」(六十拜河南尹)『白氏文集』

卷五八）「急景凋年急、於水、念此攬衣中夜起」（和「自勸二首」其二、同卷五二）などと詠まれており、その流れの戻ることなき様も「百川東到海、何時復西帰」（「長歌行」漢魏の頃の古歌）の類であろうか。

## 十七 絵合

窈窕美人今絵合 窈窕たる美人 今し絵合し

椒房左右決雌雄 椒房の左右 雌雄を決めんとす

紫綃裁出藤重女 紫綃裁へ出す 藤重の女

白髮写成竹取翁 白髮写し成す 竹取の翁

赤石新図為第一 赤石の新図 第一と為し

黃門後素豈相同 黃門の後素 豈に相同しからんや

花前勸醉玉琴調 花前に酔を勸む 玉琴の調

暁樹鳥啼事已終 暁樹に鳥啼いて 事已に終われり

（七律。雄・翁・同・終（上平声東韻））

藤壺女院と冷泉帝の両御前で行われた絵合を描いたのが本詩で、巻名は初句に詠み込まれている。聯毎に訳出すると次のようになるだろうか。

しとやかで美しい（梅壺女御と弘徽殿女御のお二人の）

方々が今しも絵合に興じなされ、後宮は左右に分かれて勝負を競われたのでございました。

（帝の御前の時には）紫の絹をととのえ（相は紅に）藤襲の衣姿の童女が絵巻を御前に並べたりし、（藤壺院の御前での時には竹取物語の）白髪の竹取の翁の姿が描き成されておりました。

（帝の御前での折、光源氏様が須磨）明石の新装の図巻を持ち出され、その巻に人々は魅了されて一番素晴らしいということになりまして、（さすがに）権中納言様の御用意された絵巻もかないませんでした。

（二月二十日余りの頃）咲く花の前で杯を勧め、（他の方々と共に光源氏様は）美しい琴の曲を調べなされ、夜明け前の木立に鳥が鳴く頃にはこの絵合も終ったのでございました。

絵合開催に至る迄のことを少し付言すれば次のようになろう。

梅壺女御（前斎宮。六条御息所の女）が藤壺の後押しで冷泉帝の後宮に入り、弘徽殿女御（頭中将の女）と寵愛を二分する状況となった。光源氏は朱雀院の彼女への思いを感じながら、己と御息所との関係を想起しつつ、彼女を支える側に身を置く。

帝は「よろづのことにすぐれて絵を興あるものに思したり」(②376頁1～2行)と絵画に興味を持たれ、梅壺もまた「いとをかしう描<sup>か</sup>かせたまひければ(②376頁3～4行)」という才の持主であつてみれば、寵愛の彼女に傾くのも自然なことであつた。これに危機感を募らせたのが弘徽殿の父権中納言で、絵の「すぐれたる上手ども」(②376頁12行)を召して、「物語絵こそ心ばへ見えて見どころあるものなれ」(②376頁14～15行)と多くの絵を描かせ、帝に御覧に入れる準備を進めている。一方光源氏も「長恨歌」「王昭君」絵巻など御覧になりながらも、帝に御覧戴くにふさわしい絵を選び出そうとし、須磨・明石の絵日記などを開いては感慨にふけるのであつた。両者は互いに競つて絵巻の用意をし、遂に藤壺女院の御前にて先ずは物語絵合を開催することとあいなる。

首聯の背景は「中宮も参らせたまへるころにて……左<sup>さ</sup>右<sup>みぎ</sup>と方<sup>かた</sup>分<sup>わ</sup>かたせたまふ。……心々に争ふ口つきどもをかしと聞こしめして」(②380頁1～7行)とある藤壺の御前で場面であらう。もつとも帝の御前の折にも「左<sup>さ</sup>右<sup>みぎ</sup>の御絵ども参らせたまふ。女房のさぶらひに御座<sup>おまし</sup>よそはせて、北<sup>きた</sup>南<sup>みなみ</sup>方<sup>かた</sup>々<sup>々</sup>分<sup>わ</sup>かれてさぶらふ」(②380頁10～12行)とあるにはある。「窈窕」は女性のしと

やかな様。誰でも「窈窕淑女、君子好逑」(『毛詩』周南「関雎」)を想起しよう。毛伝に「窈窕、幽閒也。……是幽閒貞專之善女」などとなり、『文選』にも多用される表現であるが、「窈窕双鬟女、容德俱如<sup>レ</sup>玉」(『続古詩十首』其五「白氏文集」卷二)「窈窕鳴<sup>レ</sup>衣玉、玲瓏映<sup>レ</sup>彩舟」(山田三方「七夕」『懷風藻』)の例などを挙げておこう。「椒房」は皇后の宮殿。「後宮、則有<sup>レ</sup>椒房、皇妃之室」(『班固「西都賦」』『文選』卷一)とある呂向注に「椒房、以<sup>レ</sup>椒塗<sup>レ</sup>壁、后妃居<sup>レ</sup>之」と見えるが、『初学記』(卷一〇・皇后)には更に詳しく、「椒房(班固西都賦曰、後宮則掖庭椒房、后妃之室。漢官云、皇后称<sup>レ</sup>房。詩云、椒聊之美、蕃衍盈<sup>レ</sup>升。国人美<sup>レ</sup>其繁、以<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>興。又以<sup>レ</sup>椒塗<sup>レ</sup>宮室)。亦取<sup>レ</sup>其温暖辟<sup>レ</sup>惡氣」<sup>二</sup>とある。椒の实の繁茂に子孫繁栄をみるのだとも、椒を宮室の壁に塗り込めて温暖を保ち悪気を避けたことからとも、と語源に言及している。ともあれ、「梨園弟子白髮新、椒房阿監青娥老」(『長恨歌』『白氏文集』卷一二)はよく知られた例であらうし、「椒房便駐千秋色、蘭路時臨万歲陰」(大江以言「水樹多<sup>二</sup>佳趣<sup>一</sup>」『類聚句題抄』329)は本朝詩の一例。「決雌雄」は勝ち負けを決める。「願与<sup>二</sup>漢王<sup>一</sup>挑<sup>レ</sup>戰、決<sup>二</sup>雌雄<sup>一</sup>」(『史記』項羽本紀)は有名な例で、「鵝

眼群飛分<sup>二</sup>母子<sup>一</sup>、聾<sup>レ</sup>牙并走決<sup>二</sup>雌雄<sup>一</sup>」(藤原衆海「秋夜書」懷呈<sup>二</sup>諸文友兼南隣源処士<sup>一</sup>」『本朝文粹』卷二二・389)と用いられている。

頤聯の第三句は帝の御前での絵合を始める先に「左は紫檀の箱に蘇芳の華足、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染の唐の綺なり。童六人、赤色に桜襲の汗衫、相は紅に藤襲の織物なり。……みな御前にかき立つ。上の女房前後と装束き分けたり」(②385頁13行～386頁4行)とある部分を意識しての表現であらうが、詩句としては、次句との対を考慮して「宇津保の俊蔭」あたりを詠んで、藤壺の御前の場面で統一したかったところという気もする(頤聯は帝の御前の場面で対を構成している)。第四句はその箇処「まづ、物語の出で来はじめの親なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合はせて争ふ」(②380頁7～9行)による。「紫綯」は紫の布や衣。「綯」は薄織のこと。「紅綯信<sup>レ</sup>手舞、紫綯随<sup>レ</sup>意歌」(小庭亦有<sup>レ</sup>月」『白氏文集』卷六二)とあり、白詩では歌妓を指して用いている。「裁出」は「裁出還迷長短製、刃愁定不<sup>二</sup>昔腰围<sup>一</sup>」(橘直幹「擣衣詩」『和漢朗詠集』卷下・擣衣348)とあり、本来布を刀で裁ち切る意で、「涙痕裏破燕支臉、剪刀裁<sup>レ</sup>碎紅綯巾」(山石榴」『白氏文集』卷

一一)などとも見えるにほぼ同意なのだが、ここでは整えて出すという程の意かと考えた。「丹与<sup>レ</sup>青、壁上裁<sup>レ</sup>成山水形」(菅原清公「奉<sup>レ</sup>和清涼殿画壁山水歌」『経国集』卷四)のように「裁成」(成は平声)の語形もあるが、次句の対語の「写成」との平仄の関係を考慮して「裁出」(出は仄声)を用いたものかも知れない。「写成」は白詩に見える「唯有<sup>二</sup>詩人応<sup>レ</sup>解愛<sup>一</sup>、丹青写<sup>レ</sup>出与<sup>レ</sup>君看」(画<sup>二</sup>木蓮花図<sup>一</sup>「寄<sup>二</sup>元郎中<sup>一</sup>」『白氏文集』卷一八)と殆ど同じとみて良からう。

頤聯は、藤壺の御前では決着つかず、「大臣参りたまひて、かくとりどりに争ひ騒ぐ心はへどもをかしく思して、「同じくは、御前にてこの勝負定めむ」とのたまひなりぬ」(②383頁2～5行)という光源氏の提案で、帝の御前で改めて絵合が行われることとなったが、それでもなかなか勝負が定まらずにいたところ、「左はなは数ひとつある果てに、須磨の巻出で来たるに、中納言の御心騒ぎにけり」(②387頁8行)と須磨の絵巻が出されるに至り、その素晴らしさに「たぐひゆかし。誰も他<sup>こと</sup>ごと思はさず、さまざまの御絵の興これにみな移りはてて、あはれにおもしろし。よろづみなおしゆづりて、左勝つになりぬ」(②388頁3～7行)と梅壺側が勝利を収めることとなった条を

背景にしている。物語本文では「須磨の巻」としてしているが、先に「かの須磨・明石の二巻は、思すところありてとりまぜさせたまへりけり」(②383頁6〜7行)とあったので、詩では二巻一体とみて「赤石」(明石)と表現し、次句の「黄門」との色対を意識して表現した詩作者の遊び心が伺えようか。「黄門」は中納言の唐名で当時権中納言であった弘徽殿の女御の父(頭中将)を指す。前掲のように、須磨の絵巻が出された時、彼は「御心騒ぎにけり」という状態で、結局「心して、果ての巻は心ことにすぐれたるをえりおきたまへるに、かかるいみじきものの上手の、心の限り思ひ澄まして静かに描きたまへるはたとふべき方なし。親王みこよりはじめたてまつりて、涙とどめたまはず」(②387頁8〜12行)という状況に至ったわけであるから、なすすべなく負けを認めざるをえなかった。「後素」は絵のこと。「素」は白い胡粉を言い、絵を描いた後にそれで点綴して仕上げるので言う。「絵事後素」(『論語』八佾)「画工續事(後)素」(『白氏六帖』卷九・図画)とあり、「後素筆端万物新、煙霞草木妙猶神」(藤原忠通「重賦三画障」)「法性寺殿御集」などと詠まれている。

尾聯は、勝負がついて光源氏と帥宮が才芸について語り合う

『賦光源氏物語詩』を読む(五)

場面と関わるだろう。帥宮が光源氏の才芸に「とりたてたる御心に入れて(桐壺院の)伝へうけとらせたまへるかひありて、文才をばさるものにていはず、さらぬことの中には、琴弾かせたふことなん一の才にて、次には横笛、琵琶、箏の琴をなむ次々に習ひたまへる……いにしへの墨書の手下ども跡をくらうなしつべかめるは、かへりてけしからぬわざなり」(②390頁3〜11行)などと感嘆し、「醉泣きにや」とあるあたりから、その後月が出て、和琴(権中納言)・箏(帥宮)・琴(光源氏)・琵琶(少将命婦)らの演奏が行われ、「明けはつるままに、花の色も人の御容貌かたちもほのかに見えて、鳥のさへづるほど、心地ゆき、めでたき朝ばらけなり」(②391頁3〜5行)と見えるところを意識して詠んだものであろう。「花前勸酔」の表現は「花前置酒誰相勸、容坐唱歌滿起舞」(「花前歎」『白氏文集』卷五一)「頼逢山泉盧明府、引我花前勸一盃」(「過永寧」同卷六五)「酒隔花遙酌、味帶香而弥醇」(菅原輔昭「春日同賦隔花遙勸酒詩序」『本朝文粹』卷一〇・296)など白詩や王朝漢詩によく見える表現。「玉琴」は(玉を鏤めた)美しい琴。「玉琴声悄々、鸞鏡塵霧々」(「古意」『白氏文集』卷六二)「見說秋堂事、金吾撫玉琴」(「奉和執金吾相

公彈琴之作二『菅家文章』卷一）などと見えてゐる。

## 十八 松風

奇石玲瓏靈草滋	奇石玲瓏として	靈草滋し
荒宮修理仰家司	荒宮の修理	家司に仰す
潺湲不改古園主	潺湲 <small>かは</small> 改らず	古園の主
郷国再帰明石尼	郷国 再び帰る	明石の尼
松岸諷吟風冷夜	松岸に諷吟す	風冷 <small>すさま</small> じき夜
桂河倒載月澄時	桂河に倒載す	月澄める時
仙雲遊宴唯非酒	仙雲の遊宴	唯だ酒のみに非ず
数曲管絃一絶詩	数曲の管絃	一絶の詩

（七律。滋・司・尼・時・詩（上平声支韻））

卷名は第五句に詠込まれている。これ迄の作と異なる点は押韻で初句を踏み落としているということである。

さて、この巻の概略は次のようである。明石の君らを二条院に迎え入れようとする光源氏に対し、明石の入道は妻の尼君が伝領していた大堰川畔の邸宅を改修して住まわせる算段を上京する娘らを見送る。光源氏は嵯峨野の御堂や桂の院（桂殿）の造作にかこつけて、彼女らの居処となった大堰の邸を訪れ再

会を果たすと、その邸の手入れなどを家司に指図している。二人は明石のことを想い起こし、琴をひき、歌をよみ交わす一方、光源氏は二人の間に生まれた姫君のかわいらしさに心奪われているようである。そこへ殿上人が多くつめかけて来て、彼はやむなく桂院に移動して彼らを饗応することとなる。その後彼は二条邸に戻り、紫の上に明石の姫君の引き取りを持ちかけるといふ展開である。一聯毎に訳すと次のようになるだろうか。

珍しい風情のある庭石が美しく輝き、めでたい草も茂る（かつての大堰の邸宅も）荒れた住居となっておりましてので、光源氏様は家司に修理をお命じなさいました。

（その邸の東渡殿より出づる）遣水の流れも昔の庭園の持主の時代と変わらぬまままでございまして、故里にこうして再び明石の尼君様は帰ってこられたのでございしました。

風がひどく吹く夜に、松の生えた川岸（にある大堰邸）では歌を口ずさみ、月が澄み昇る時に桂川沿いのその邸では皆酔い興じたこととでございしました。

（仙界の人とも言うべき）雲居におられる方々の宴遊では、ただ盃酒をめぐらし飲むだけではございませぬ。数曲も管絃が奏でられて絶句などもお作りになられたこととでござい

ました。

首聯の背景は「昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえけるが領じたまひける所、大堰川のわたりにありけるを、その御後はかばかしう相継ぐ人もなくて、年ごろ荒れまどふ」(②398頁10～12行)とある大堰の邸の様子である。娘の為に明石の入道が「修理」などとして、形のごと人住みぬべくは繕ひなされなむや」(②399頁3～4行)と預り人に申し入れているが、「家のさまもおもしろうて、……昔のこと思ひ出でられて、あはれること多かり。造りそへたる廊などゆゑあるさまに、水の流れもをかしうなし」(②407頁8～11行)たる有様に尼君は一人懐しさにこらえきれないようだ。光源氏も「繕ふべき所、所の預り、いま加へたる家司などに仰せられ」(②411頁3～4行)、「前裁どもの折れ臥したるなど繕はせたまふ」「ここかしこの立て石どももみな転び失せたるを情ありてしなさをかしかりぬべき所かな」……(②411頁6～8行)などと修理を進める。「奇石」(風情のある庭石という程の意。物語本文の「立て石ども」に対応)「靈草」(めでたい草)の語の一例に「嵯山多靈草、海浜饒奇石」(江淹「雜体詩三十首」其一七『文選』卷二一)があり、注に「郭璞遊仙詩曰、丹丘有奇草、鍾山出靈

液」(李善)「靈草、芝草也。……奇石可食而仙」(劉良)と見え、班固「西都賦」(『文選』卷二)にも「靈草冬榮、神木叢生」(呂延濟注に「靈草神木、言美也」とあるが、物語本文には靈草らしいものは見えていない。この大堰邸に凡俗とは異なる雰囲気漂わせるべく工夫した措辞であろうか。「玲瓏」は眼に鮮やかな様で、「朱闕玲瓏於林間」、玉堂陰「映于高隅」(孫綽「遊天台山賦」『文選』卷一一)「澗雪庄多松偃蹇、巖泉滴久石玲瓏」(泛太湖「書事寄微之」『白氏文集』卷五四)などあり、殊に白詩にはよく見える語である。「滋」は草木の繁茂する様で、「堂上流塵生、庭中綠草滋」(劉鑠「擬行々重行々」『文選』卷三一)などと用いられている。「荒宮」は前引の「年ごろ荒れまどふ」邸を受けて言い、荒涼とした邸宅の意。一般的な「荒居」などとせず敢て「宮」を用いたあたりには皇胤たる人の住居という意識をひそませているのかも知れない。「修理」は先の本文に「修理などして」「繕ふ」などとあったのを反映する。「修理長安高廟」(『後漢書』卷一下・光武帝紀第一下・十年春条)「修理高安城」(『続日本紀』卷一・文武天皇二年八月二〇日条)はその例だが、一般的に詩には殆ど用いられない語か。「家司」も前引の物語



本文に見えている。貴顕の家にいてその家政を掌る職員のこと。「親王及公卿職事三位已上、以<sub>レ</sub>家司、為<sub>レ</sub>保長」(『類聚三代格』卷一六・貞観四年三月十五日太政官符)とあるが、古くは「其家令帳内等並從<sub>レ</sub>放免」(『続日本紀』天平元年二月一三日条。長屋王が密告により自殺した直後の記事)のように、中国漢籍に習い本朝でも家令(かれい・けりよう・いへづかさ)と記されていた。

頷聯も引続き大堰邸の場面。第三句「潺湲」は水の流れ(る音)。ここはかの邸の遣水を移す。物語本文には先述の他に「東の渡殿の下より出づる水の心ばへ繕はせたまふ」(②41頁14行)や、光源氏が尼君に「昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふに、繕はれたる水の音なひかごとがましう聞こゆ」(②43頁2〜4行)などに見える。その後に二人の歌のやりとりがあり、尼君の歌に答えた光源氏の歌中の「もとのあるじ」(②43頁8行)が、詩の「古園主」に対応しているよう。「且申<sub>二</sub>独往意<sub>一</sub>、乗<sub>レ</sub>月弄<sub>二</sub>潺湲<sub>一</sub>」(謝靈運「入<sub>二</sub>華子崗是麻源第三谷<sub>一</sub>」『文選』卷二六、李善注に「潺湲、水声也」)は「潺湲」の語例。霊運の下句は「菅家文章」(卷六「北堂文選竟宴各詠<sub>二</sub>史句得<sub>三</sub>乗<sub>レ</sub>月弄<sub>二</sub>潺湲<sub>一</sub>」)や延喜九年九月十三日

賀宴(『西本願寺本躬恒集』10詞書)にも句題として採られた名句。「古園主」は昔の邸宅の主人で、尼君を指す。「園」は「わが園の梅のほつえに」(『古今集』498)と歌われるように「家」の意に等しい。「古園」はまた「故園、杳何処、帰思方悠哉」(韋応物「聞<sub>レ</sub>雁」)「京国帰何日、故園来幾年」(叙意一百韻「菅家後集」)のように「故園」に作<sub>二</sub>ても良<sub>一</sub>からう。尼君は「こころ年を経て、いまさらに帰」(②406頁13〜14行)り、「家のさまもおもしろうて、年ごろ経つる海づらおぼえたれば、所かへたる心地もせず。昔のこと思ひ出でられて、あはれなること多かり」(②407頁8〜10行)という次第で第四句のように表現されているわけである。「郷国」は故郷(ふるさと)。「人老何所<sub>レ</sub>楽、楽在<sub>レ</sub>婦<sub>二</sub>郷国<sub>一</sub>」(「寒食」『白氏文集』卷六二)他白詩に例も多く、「遊子不<sub>レ</sub>帰郷、国夢、明妃有<sub>レ</sub>淚塞園秋」(源孝道「望月遠情多」『類聚句題抄』79)は本朝の例。

頷聯の第五句は、移り住んだ大堰邸で明石の君が明石を恋しく思いつつ、所在なさに琴をかき鳴らす場面。「松風はしたなく響きあひたり。尼君もの悲しげにて寄り臥したまへるに、起きあがりて」尼君と女君が和歌を詠じ合う(②408頁4〜10行)あたりを背景としている。「松岸」は大堰邸が川辺の松樹の

地であつたことに依る。「風吟」は口ずさむこと。「佩」服交帶  
 録、「風吟、藥珠文」(「和送」劉道士遊天台)『白氏文集』  
 卷五二)「幽閑古寺有<sub>レ</sub>時尋、景氣蕭々足<sub>二</sub>風吟<sub>一</sub>」(藤原茂明  
 「詣<sub>二</sub>石山寺<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>感」『本朝無題詩』卷九・593)などはその語例。  
 「風冷」は松吹く風のひんやりとしている様。時は「山の錦は  
 まだしうはべりけり、野辺の色こそ盛りにはべりけれ」(②418  
 頁7行)とあるが、秋の川風、月も澄める頃なのでかく表現し  
 たものであろう。「雨寒遠感吳江水、風冷、遙思楚嶺風」(九日  
 後朝同賦「秋深」)『菅家文草』卷六「園竹露低孤独地、岸、秋  
 風冷、両三株」(中原広俊「夏日遊<sub>レ</sub>寺」『本朝無題詩』卷一〇・  
 709)などと見える。また、第六句以下は、桂の院や嵯峨野の御  
 堂に赴くのを口実に明石の君の大堰邸を訪れていた光源氏で  
 あつたが、「桂の院に人々多く参り集ひて、ここ(大堰邸)に  
 も殿上人あまた参りたり」(②415頁9〜10行)と隠れ家を見つ  
 けられてしまい、やむなく桂の院に移動して饗応する場面が背  
 景となっている。少し長くなるが引用すると次のようである。  
 大御酒あまたび順流れて、川のわたり、あやふげなれば、  
 酔ひに紛れておはしまし暮らしつ。おのおの絶句など作り  
 わたして、月はなやかにさし出づるほどに、大御遊びはじ

まりて、いといまめかし。彈物・琵琶・和琴ばかり、笛ど  
 も、上手のかぎりして、をりにあひたる調子吹き立つるほ  
 ど、川風吹きあはせておもしろきに、月高くさし上がり、  
 よるづのこと澄める夜のやや更くるほどに、殿上人四五人  
 ばかり連れて参れり。上にさぶらひけるを、御遊びありけ  
 るついでに「(帝)今日は六日の御物忌あく日にて、かな  
 らず参りたまふべきを、いかなれば」と仰せられければ、  
 ここにかうとまらせたまひにけるよし聞こしめして、御消  
 息あるなりけり。御使は藏人弁なりけり。

「月のすむ川のをちなる里なれば桂のかげはのどけか  
 るらむ

うらやましう」とあり。かしこまりきこえさせたまふ。上  
 の御遊びよりもなほ所がらのすごさ添へたる物の音めで、  
 また酔ひ加はりぬ。  
 (②418頁13行〜419頁15行)

先に「川のわたり」「川風」ともあつたように桂の院も大堰川、  
 即ち「桂河」の畔に在つた。「倒載」は逆さに載せる意だが、  
 『蒙求』(山簡倒載)に「日夕(暮)倒載、婦、酩酊無<sub>レ</sub>所知」  
 とあり、酒食を傾け尽くす、ひどく酔っ払う意もあり、「山翁  
 倒載、無<sub>レ</sub>妨<sub>レ</sub>学、范蠡扁舟未<sub>レ</sub>要<sub>レ</sub>追」(酬<sub>下</sub>裴相公題<sub>二</sub>興化小

池「見」招長句」「白氏文集」卷五五）「群公倒載、帰、彭沢宴誰論」（大津皇子「春苑言宴」）「懷風藻」）「倒載 サカサマニノル、同醉也、タウサイ」（色葉字類抄）などと見えている。「月澄」は月光の澄みきった様。「夜泊鸚鵡洲、江秋月澄澈」（夜聞「歌者」）『白氏文集』卷一〇）「貫霜侵雪竹能勝、又引三煙輕与三月澄」（源順「夏日閑居詠庭前三物」其二）「竹」「本朝文粹」卷一・31）「庭の面はまだ乾かぬに夕立の空さりげなく澄める月かな」（新古今集」267・源頼政）などと詩歌に見える。

尾聯もほぼ既引の物語本文に重なる場面に依っている。「仙雲」は仙界の雲だが、ここは雲居、即ち宮中（に在る人）を暗示する。白詩でも宮中に仕える官吏を「仙郎」とよんでいるが、宮中が俗外の地とされるのは本朝も同じ。内大臣光源氏の桂の院における響応の場に殿上人らが多くつめかけて大騒ぎとなり、酒盃が幾度も回されるのみならず、管絃の合奏が月下に響き渡り、各人が絶句一首を作ったりというのも前掲文通りである。「遊宴」は酒盛りして楽しむこと。「朝忙少遊宴、夕困多眠睡」（「張常侍池涼夜閑譚贈」諸公）『白氏文集』卷六二）「公

卿乍会初遊宴、幸甚生涯不測恩」（「北堂澆章宴後聊書」所懷……）『菅家文草』卷二）などとなる。また、「数曲管絃侵入御水、一張屏障遍窓山」（藤原諸蔭「奉同羽林藤校尉侍中稽于山居」之什）「扶桑集」卷七）は「数曲管絃」の一例。猶、飲酒と弾奏が一体となることも多い。白詩「琵琶引序」に、琵琶弾きの女を前にして「命、酒使、快、彈、数、曲」とあつたが、その音色が響き渡ったのも「江心秋月白」く澄みきった折であり、居易は彼女の演奏に仙界の音楽を聴いた心地になったという。物語本文の「川風吹きあはせておもしろきに、月高くさし上がり、よろづのこと澄める夜……上の御遊びよりも、なほ所がらのすごさ添へたる物の音をめでて、また酔ひ加はりぬ」（②419頁3～15行）あたりに、「琵琶引」のイメージの一部を借りているかと思つたのは稿者の思い過ごしであろうか。「二絶」は絶句一首の意。白詩に「将帰一絶」（『白氏文集』卷六四）と題する作もあり、「願以今朝供一絶、毎逢花月解吟詩」（具平親王「四月八日灌仏詩」『本朝麗藻』卷上）とも詠まれている。